

ペトロの信仰告白

マタイ福音書 16章 13-20

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府（よみ）の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

<説教>

外国に行って祖国を思うと普段とは違って自分の国を見つめることができる、という話を聞いたことがあります。

さて、きょうのテキストはフィリポ・カイサリア地方に行ったとき・・・という箇所から始まります。フィリポ・カイサリアはガリラヤ湖から直線距離で北へ50キロぐらい、ここからだ（神奈川県大和市）奥多摩あたりになるでしょうか。そんなに遠くはありませんが、当時のイエスやペトロたちにとっては外国であり、異教礼拝の盛んなところでした。そんな処、フィリポ・カイサリアに退いてイエスは弟子たちに問いかけます。

「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」（15a）

エレミヤだ、とか預言者だ、とか答える弟子にたいしてイエスは再度、問いかけます。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。(15b-16)

福音書のほかの箇所でもこのようなイエスと弟子のやりとりがなんだか記録されているので、きょうのテキストもその中のひとつのようにも思えます。また、19節以下のイエスのことば「天の国の鍵を授ける」という箇所にこそ重点があるように思えるところでもあります。ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、ここはプロテスタントとカトリックの意見が分かれるところでもあり、解釈の違いからキリスト教内での対立を生み出した問題の箇所でもあります。第一朗読のイザヤ書に「わたしは彼の肩に、ダビデの家の鍵を置く」とありましたが、この天国の鍵云々は旧約聖書のことばを踏まえているのだなという理解が必要な福音ではないでしょうか。

さて、イエスはなぜ異教の地にいて弟子たちに自分のことをお尋ねになったのか、また、そのペトロの答え（ペトロの信仰告白）をイエスが高く評価したのはなぜか？

元漁師のペトロはイエスにずっと付き従ってきて、そのことばを聞き、その日ごろの姿を見、日常生活を見、そして力ある業を見えています。ペトロから見た実際のイエスは、人間の力で行っている活動しているのではない、どこか人の成り立ちの根元から、ほんとうの神さま自身からあふれていることばであり、業である、という風にペトロはどうしても言わずにははいられなかった、あなたのことばは本当に神さまのおことば、あなたの愛は神さまの愛だという風に、どうしても言わずにははいられなかった。だから、ペトロはこう告白しました。

「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)

つづいてイエスのペトロ評価のことばになります。

**バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、
血肉ではなく、天にいますわたしの父である。**（17節口語訳）

イエスのことばの「血肉ではない」、そこが大事です。

おまえがイスラエルの民の一人だからとか、あるいはわたしの側にしょっちゅういたからとか、そういうようなことで分かったわけではない、ということ。 「この事をあらわしたのは、血肉ではない」というのは、こういうことがおまえに本当に言える、告白できる、ということは、おまえの血筋ではない、ただわたしにつき従っていたからだけではない、そうではなくて、天にいますわたしの父がおまえにそのことを知らせたのだ、ということです。イエスは父のひとり子として直接神さまとつながっています。ペトロに「生ける神の子です」ということが分かったのは、イエスが父の子として直接神と結びついているのと同じように、天の父が直接ペトロに知らせ、イエスのことばや行いは、人の成り立ちの根元、ほんとうの神さまからでていうことを分かせてくれたということです。このことが分かったペトロは譬えていえば、よい土地に蒔かれた種を実らせた、砂の上ではなく、堅い岩の上に建てた家となったということです。

言い換えれば、イエスとして現れた神の子が、同じようにペトロのところにもいる。イエスがそれによって孕まれた聖霊がペトロのところでも働いているということです。そういうことがなければ、イエスのことばがどこから出たものか分からないということです。これは決定的に重大です。このことを踏まえると天国の鍵云々ということは第一義ではなくなります。またちょっとあと（注）にでてくる自分の十字架を背負うという意味もわかってきます。神の子イエスの十字架にただぶら下がるのではなく、銘々がそれぞれの十字架を背負うということがいかに大切かということがわかります。でも大変そうです？ いやいや、そうではありません。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。

マタイ 11:28-30

「岩の上に教会を建てよう」といっても何かその一番の根元の大事なところを抜かしてしまって、出てきた形を建てて、これが教会の岩です、といったところでそれでは逆立ちです。教会堂の屋根に岩が乗っかっているようなものです。教会というのは血肉（人間）によらずに、父からの直接の、つまり父・子・聖霊一体の神からしてイエスの姿が新しく生まれ出てくるとき、それがキリスト教会の姿、という風にとるべきでしょう。

注) わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。16章 24節
